

## アクセル・ホネットの物化と承認の理論

奥 谷 浩 一

---

### 要 約

アクセル・ホネットはいわゆるフランクフルト学派の第三世代にぞくすると評されるドイツの哲学者・社会学者である。その彼が『物化』を公刊した。この著作の意図は、マルクスによって創始されルカーチによって継承された物象化論に今一度アクチュアリティを与えようとするところにあるが、それはかなり特異な「物化」論でもある。その大きな特徴は、ルカーチの理論の読み換えを行い、彼独自の「承認」という概念を用いてこれを「物化」論に適用し、「物化」を「承認の忘却」として理解することである。しかし、こうした特異な「物化」論は、マルクスとルカーチによって定式化された物象化論から資本主義的商品交換社会という視点を排除し、本来社会的次元で生ずるはずの個々人どうしの「相互承認」の概念内容をも変更して、個人と環境世界との間の、しかも認知以前の「承認」へと拡大するとともに、個人的・人間学的な次元で読み換えようとするものであり、きわめて問題の多いものである。そしてそれは、その強引と思える読み換えと鍵となる概念内容の拡大によって、本来の物象化論がもつ社会批判としての意義を解消しかねないように思われる。本論文では、こうした観点から、マルクスとルカーチの物象化論に立ち帰ってまずその基本的思想を確認し、この準備作業から見えてくる、ホネットの「物化」と「承認」の理論がもつ問題点を分析する。

キーワード：物化、物象化、承認、相互承認、物神崇拜、資本主義的商品交換社会

### 目 次

はじめに

- 第1章 ホネットの物化論の特徴
  - (1) ルカーチに対する肯定的評価
  - (2) ルカーチに対する否定的評価
  - (3) ルカーチからハイデガー、そしてデューイへ
  - (4) 「承認」と認識に対する「承認の」優位
  - (5) 「承認」の忘却としての物化
  - (6) 自己物化または「固有の自己」の物化について
- 第2章 マルクスにおける物象化と物神崇拜の理論
- 第3章 ルカーチによる物象化論の継承と展開
- 第4章 ホネットの物化論と承認論の問題点の総括

## はじめに

アクセル・ホネット Axel Honneth (1949—) は、現在ドイツのフランクフルト大学哲学・歴史学部教授を務めるとともに同大学社会研究所所長を兼任している哲学者であり、ユルゲン・ハーバマスのコミュニケーション理論の影響を受けながら、彼の後継者として、いわゆる「フランクフルト派の第三世代」を代表すると目されている人物である。ただし、ホネット本人はそう呼ばれることを歓迎してはいないようである。そのホネットが2005年に“Verdinglichung: Eine Anerkennungstheoretische Studie”と題する著書（これを直訳すれば『物化—ひとつの承認論的研究』）を出版した<sup>(1)</sup>。これは、『権力の批判』、『正義の他者』、『承認をめぐる闘争』<sup>(2)</sup>に次ぐ彼の主著のひとつであり、とりわけ『承認をめぐる闘争』において彼が展開した承認論をさらに拡大してこれを物化論と独特なかたちで結合させた著作である。

周知のように、物象化論の定礎者であるマルクスの理論に再び照明を投げかけたのがハンガリーの哲学者・文学者ジェルジ・ルカーチ (1885—1971) である。彼は1923年の著書『歴史と階級意識』のなかで、マルクスが『資本論』において展開した、発展した商品経済社会における主要な傾向としての物象化と商品または貨幣の「物神崇拜」（または呪物崇拜）への傾向にかんする理論を継承しただけではなくて、当時の社会状況を踏まえ、またマルクス以後のマックス・ウェーバーらの社会科学の成果を取り入れながらも、労働者階級による社会変革の方向性を指し示そうとした。この書物の中で追究された物象化論は、第一次世界大戦と第二次世界大戦との間のいわゆる「戦間期」の労働運動および革命運動の高まりのなかで、主としてヨーロッパ左翼または「西洋マルクス主義」の社会・文化批判に大きな影響を与えた。その影響は、第二次世界大戦後のドイツでは主としてホルクハイマーやアドルノらのフランクフルト学派の第一世代による「批判的理論」に、そしてこの学派の第二世代にぞくするハーバマスらの業績にも及んでいる。ホネットもまたこうした継承関係のもとに、彼なりの物化論を展開しようと試みている。

ホネットの見方によれば、物化または物象化という概念は、第二次世界大戦後のヨーロッパにおいてはもはやかつてのような社会・文化批判や時代の診断を主導する中心的なカテゴリーとしての役割を果たすことはなかったが、しかし、最近になって文芸や哲学の世界で再び議論の俎上に上るようになってきた。そして、彼はこうした機運をとらえて、ルカーチの物象化論を踏まえるとともに、これに一定の批判を行いながらこれを批判的に改作し、これに読み換えを行うことによってこの物象化論に再びアクチュアリティを与えようと試みる。そのさいに、ホネットが持ち出すのが「承認」というキーワードである。これは、本論文が検討の対象とする『物化』に先だって公刊された彼の著書『承認論をめぐる闘争』において展開された彼独自の「相互承認」論および承認概念とかがわっている。要するに、われわれの認知以前の根源的な「承認」の「忘却」が「物化」なのだというわけである。ここに見られるのは、物化論と彼独自の承認論との独特な結合であり、彼の著作『物化』の副題が「ひとつの承認論的研究」とされる所以である。ホネッ

トのこの試みは、ルカーチの物象化概念を、「承認」概念を用いて再定式化し、ルカーチの理論の中に含まれているいわば不純物を取り除いて、現在の問題に活かそうとするところにその真意がある。つまりそれは、彼自身の言葉で言えば、「ルカーチの物化概念を承認論的に改良する私の試み」<sup>(3)</sup> にほかならない。

しかし、この試みを成功に導くためには、物象化論を初めて叙述したマルクスの経済学理論、そしてこれから出発しながらもこれにマルクス以後の社会科学の成果を盛り込んで物象化概念をさらに豊かな社会批判の武器としようとしたルカーチの物象化論、そして特に直接にはヘーゲルに由来する相互承認論などを正確に理解し、そしてこれらの概念の異同と継承の複雑な関係を正確に踏まえることが必要である。ホネットはこれらの概念の継承関係をどの程度正確に踏まえているであろうか。そして、彼の上述の試みははたしてどの程度成功しているといえるであろうか。さらに、彼の独特な物化論ははたしてこの物象化論の伝統に本当にアクチュアリティを与えることに成功しているであろうか。本稿においては、こうした観点からこのホネットの特異な物化論を批判的に検討することにしたい。

なお、ドイツ語の訳語と訳し分けは常に問題を孕んでいる。原語のVerdinglichungを「物象化」と訳したり、これとVersachlichungをとともに「物象化」として訳し分けをしなかったする場合もあるようである。本論文では、煩雑となる嫌いはあるが、特に訳文が問題となる場面では、Verdinglichungを「物化」、Versachlichungを「物象化」として一応の訳し分けを行った。しかし、これらのふたつの概念を含む同一の問題次元を指示する場合には、従来から「物象化」という概念が広義の意味で一般的に使用されてきたので、これに従った。したがって、ホネットの物化論、マルクスとルカーチの物象化論などというような煩瑣な表現をせざるをえなかったことを断っておきたい。私は、ドイツ古典哲学およびマルクス主義的理論の展開過程におけるこれらの概念の成立と変遷、これらの概念の同一と差異、フランクフルト派における物化または物象化概念の変遷などについては、将来さらに広範な社会哲学的研究のなかでまとめたいと考えているが、本論文はその研究のささやかな着手点である。

## 第1章 ホネットの物化論の特徴

### (1) ルカーチに対する肯定的評価

物象化論そのものを真剣に議論しようとするれば、どうしてもこの理論の定礎者であるマルクスの経済学理論を踏まざるをえないが、ホネットはきわめて不思議なことに、この必要な準備作業を回避している。そして、ルカーチが『歴史と階級意識』の中で展開した物象化論をいきなり議論の俎上にのせている。ホネットが物象化の概念の正確な把握、そしてマルクスからルカーチを経てフランクフルト学派へといたる物象化概念の異同と変遷を正確に把握しようとしなことは、彼の理論の第一の問題点である。

ホネットはルカーチの物象化論をどう評価しているかといえば、これを全体として一応は肯定的に評価している。それは、ルカーチが「1923年に公刊された彼の論文集『歴史と階級意識』のなかで、マルクス、マックス・ヴェーバー、ゲオルク・ジンメルの著作に由来するモチーフを思い切って総括することによって、この鍵概念を作ることに成功した」<sup>(4)</sup>からであり、またこの著作が倫理的原則をもちだすことなく「われわれの生活実践の病理学の社会存在論的な解明を提供する」<sup>(5)</sup>からである。また、アドルノらのフランクフルト学派の代表者たちと同様に、ルカーチが近代ジャーナリズムを批判したこと、つまりそれが商業主義に陥って、「無節操」や「体験と信念の身売り」などのグロテスクな実態を示していることを資本主義的物象化の頂点と見なして批判した<sup>(6)</sup>ことも、高い評価に値すると見なしている<sup>(7)</sup>。しかし、ホネットがルカーチの物象化論を真に評価するのはせいぜいここまでで、彼の批判の矛先はただちにルカーチ物象化論の中味に向けられる。

## (2) ルカーチに対する否定的評価

ホネットによれば、ルカーチの物象化論の根本的な問題点は、さまざまな物象化現象の根本的な原因が「商品交換の資本主義的な普遍化」にあるとしたこと、言い換えれば「商品交換と物化との同一視」<sup>(8)</sup>にある。そして、ホネットはルカーチのこうした見方が説得力に乏しいと見なし、さらにルカーチの物象化論の問題点を以下の五点にわたって詳論する。

第一に、ルカーチには「社会的諸関係の脱人格化Entpersönlichungの過程と物化という出来事とを同一視する」<sup>(9)</sup>というきわめて疑わしい傾向がある。『貨幣の哲学』の著者ゲオルク・ジンメルは、市場における相互行為が増加するにつれて行為の相手の特性に対する無関心も増大するのはなぜかを問題としたが、ルカーチの物象化論はこのような問題意識をもたず、これを社会関係の「物化」と同一視している。

第二に、ルカーチの物象化論を構成する局面は、①他の人物の物化、②対象または自然の物化、③固有の自己の物化、の三つのアスペクトに区分されると考えられるが、ルカーチは資本主義的市場が拡大するにつれてこれら三つのアスペクトが関係しあいながら必然的に強化されると考えている。ルカーチはこうした結論を経験的にでなくて論理的必然性から導き出しており、これら三つの次元にはもともといかなる必然的な連関もない<sup>(10)</sup>。しかし、ホネットによるこのルカーチ解釈がどこまで正確であるかがまず第一に問題となろう。

第三に、ルカーチは、マルクスの経済的諸関係が法的・文化的・道徳的な諸関係を規定するとした土台-上部構造論にもとづいて、資本主義的な市場流通における物象化がすべての社会的生活の領域に浸透すると見なした。しかし、こうした経済主義的な考えには恣意性がつきまとい、ルカーチは家族・親子関係・公共圏・レジャー文化などの「植民地化Kolonisierung」が生じることについて何も説明していない<sup>(11)</sup>。

第四に、ルカーチは物化現象にかんして経済的な交換過程との深い関連からのみ説明するため、物化の極端な形態であるはずの人種主義や人身売買などの非人間的な数々の行為についてま

ったく不問に付している。これは「体系的な盲目性」によるものであって、「最終的にはただ経済的な強制だけが人間の人間の諸特徴の拒否へと導きうるという先入見」<sup>(12)</sup>と強く関係している。

第五に、ルカーチは資本主義的商品交換過程と強く結びついた物化だけを問題とし、こうした物化以外の社会的な物化の起源について問題とすることがなかった。つまり、物化論においては資本主義的商品経済以外の物化も問題とされるべきである。「ルカーチの視線は一面的に資本主義的商品流通の行動形成作用にだけ向けられていたので、これに加えてそのほかの社会的な物化の起源があることを考慮することができなかった。」<sup>(13)</sup>

以上の五点を掲げたうえで、ホネットは結論をこう断定する。「少なくともこれらの〔上記のひとつを除いて一筆者〕四つの問題があるので、今ではルカーチ的な物化分析の社会的な説明枠組みを全体として捨て去ることが賢明であるように思われる。」<sup>(14)</sup>要するに、ホネットはルカーチの物象化論を再定式化し、これに現代的なアクチュアリティを付与するには、この物化論から資本主義的な経済市場や商品交換社会などの経済学的な諸関係を考慮の外へと追いやり、そのうえでこの経済学的諸関係にとって替えて、彼独自に解釈した「承認」という視点を導入することを提唱している。しかし、資本主義的商品経済に直接関係しない物象化現象があることと、物象化現象を社会的または社会科学的に考察する説明枠組みを捨て去ることとはまったく別次元にぞくする事柄である。私見によれば、ホネットのこうしたルカーチ解釈は、本論の最終章で総括するように、マルクスからルカーチへと受け継がれた物象化論そのものを根底から崩壊させかねず、物化論または物象論が近代資本主義社会を本質的に特徴づけるとともに、それゆえに社会資本主義社会を批判する強力な理論的武器としてもつ意義を丸ごと投げ捨てかねない暴論にはかならないと思われる。

### （3）ルカーチからハイデガー、そしてデューイへ

社会経済的な基盤を切り離されたホネットの物化論は根なし草のように水上を浮遊する。ホネットはルカーチの物象化論を丸ごと投げ捨てるわけではない。彼が投げ捨てるのは、物化の現象をただちに資本主義的経済諸関係へと結合させる側面であって、ルカーチの思想に含まれるそのほかの側面は積極的に、ただしあまりにも自分の理論に強く引きつけながら、利用しようとする。例えば、ルカーチのいわゆる「主体・客体の弁証法」に含まれる一側面に着目し、これをハイデガーやデューイに強く引き寄せ、彼らを経由するかたちでルカーチを再利用しようとする。ルカーチは『歴史と階級意識』の他の箇所でも、近代哲学とこれにもとづく認知主義がこれまで伝統的に前提してきた主体と客体との二項的対立図式に付きまわられてきたことを批判しつつ、主体・客体の弁証法を展開しようとした<sup>(15)</sup>が、ホネットはここにルカーチとハイデガーとの共通点があると理解する。ハイデガーもまた、「気遣いSorge」<sup>(16)</sup>という概念から出発することで、同じように近代認識論が前提してきた主客図式を反駁しようとしたからである。そして、ホネットはさらに進んで、ルカーチが言及した、労働者がしばしば陥りかねない「静観的態度 das

kontemplative Verhalten」<sup>(17)</sup> や「ただの傍観者 ein einflußloser Zuschauer」<sup>(18)</sup> などの規定が経済的諸関係と直接には関係しない物象化概念であると理解して、これを媒介物としてルカーチを強引にハイデガーの方へと引き寄せる。ホネットは「二人の思想家 [ルカーチとハイデガー—筆者] は、配慮と実存的な関心によって特徴づけられる、人間的生活形式のあの要素的な諸構造が、誤った、存在論的に目をくらまされた現存在のただなかに、いつもすでに現存しているに違いない、という確信を共有している」<sup>(19)</sup>、あるいは「二人の著者は同時に、物象化された物的な諸関係の表象が、解釈上のヴェールのように、実的な配慮と関与という諸事実を覆い隠すという点で、一致している」<sup>(20)</sup> と述べている。

文脈を無視してあまりにもハイデガーへと傾斜されすぎたこうしたルカーチ理解を仲立ちとして、ホネットは物化論を「承認」概念によって置き換え、自らの「承認」論を基礎に物化論を再構成しようとする。つまり、物化は「承認」を「忘却する」ことによって生ずるという独特な物化論が提示される。これがホネットの物化論の核心である。つまり、彼の独特な物化論は彼の独特な「承認」論と結合して展開されるのである。

#### (4) 「承認」と認識に対する「承認」の優位

それではホネットの「承認」とはいかなる概念か。ホネットは、ハイデガーの「気遣い」とルカーチの「共感 Anteilnahme」の概念は「人間間の相互行為において他の主体にあてはまるだけではなくて、人間実践の状況連関にぞくする限り、原理的にどの対象にもあてはまる」<sup>(21)</sup> と述べている。そしてさらに、アメリカ合衆国の哲学者ジョン・デューイの「実践的関与」という思想もまたこれら両者と驚くほど似ているとし、そのうえでこれらの三人の思想家が「世界に対する実存的な関心の先行性という同じ根本思想」<sup>(22)</sup> を共有すると見なす。こうしてルカーチはプラグマティズムにも接近させられる。ホネットによれば、われわれは、われわれに与えられている環境世界との相互作用においては、他人に対する関係であろうと事物的対象に対する関係であろうと、与えられたすべてのものに気を配り配慮しながらこれらを質的に経験するという態度でかかわる。こうした感情的・認知的・意志的な要素のいまだに未分化な状態のままにわれわれが環境世界にかかわることをホネットは「承認 Anerkennung」と呼ぼうとする。「私は、世界に関連付けられている在り方のこうした根源的な形式を以下で承認と名付けよう。」<sup>(23)</sup> そして、この「承認」概念によって、自分と世界との関係が肯定的態度にもとづいて情緒的に関係づけられている状態が表現されていると見なし、この状態が認知的・感情的に中立的な把握や志向よりも、発生的にも概念的にも先立つのであると考えて、こう結論する。「承認は認識に対して発生的にも概念的にも優位を占める。」<sup>(24)</sup>

ルカーチが「共感」または「参与」と訳しうる言葉を述べたとしても、付随的にそうしたのであって、これらは決して彼の主要概念ではありえない。これを拡大解釈してハイデガーやデューイに引き寄せることは許されないであろう。また、「承認」の概念も、かつて、ホネットが研究したように、ドイツ古典哲学、なかんずく初期ヘーゲルの実在哲学と『精神現象学』の中で展開

されたものである。それは、社会契約説のように虚構から自然法を導き出すのではなくて、近代的個人が他者に対しておのれの欲望と自立性を主張することで他者と生死を賭けた闘争状態に入るが、その中でそれぞれが利己的欲求や占有への固執を制限してお互いを承認しあい、そうしていっそう高い普遍的在り方へと自らを形成陶冶することによって、共同体と法的状態とが達成されるという論理的必然性を叙述したものである<sup>(25)</sup>。ところが、物化論におけるホネットの承認概念は「だから承認する態度とは、他の諸人格と物とがわれわれの現存在遂行に対してもつ質的意味を尊重することを表現する」<sup>(26)</sup> というような次元にまで、その本来の意味が外延的に拡張されるとともにその意味が内包的に薄められてしまう。このように無規定となり、それゆえに無内容となった「承認」概念がその根拠を明示されずに物化へと接続されてしまうのである。ホネットは、先立つ著書『承認をめぐる闘争』のなかで、初期ヘーゲルの承認概念とアメリカの社会心理学者ジョージ・ハーバート・ミードの自我形成論が類似しているの見なし、前者を後者によって読みかえることに努めたが、諸個人の闘争を通じた相互承認による共同体・法的状態の実現と自我のアイデンティティの達成とは異なった問題次元にぞくするものである。ここにすでにホネットによる、『物化』における承認概念の限りない拡大と曖昧化の伏線があったといえよう。

#### （5）「承認」の「忘却」としての物化

われわれはここでようやくホネットの物化論の核心を論じることができる。ホネットは自らの「物化」の概念を以下のように定義する。「物化」とは、「思考習慣、習慣的に硬直化した視点であって、こうした視点を取ることによって主体は関心をもって受け入れる能力を失うとともに、その主体の環境世界も質的な開放性を喪失する。」<sup>(27)</sup> つまり、ホネットは「物化」という概念によって、他人であれ事物であれ、当初は自らの環境世界のなかの対象を肯定的に受け入れ、これらと共感しているという本源的状態、すなわちこれらを「承認する」状態にありながら、その後何らかの理由によって習慣となった物の考え方や曇らされた見方を受け入れるようになってしまい、そのために環境世界の対象に対して先行的に存在していた「承認」と共感的な受け入れの態度を喪失または「忘却」するようになってしまったというような事態を指示したいようである。われわれがここで確認しておくべきなのは、物化論から社会経済的な基盤を切り離してしまったホネットの考察が、社会学的または社会科学的分析視点を喪失して、個人とその環境世界との相互作用というように、個人的または独我論的な視座に移行し、人間をいわば個人的に、したがって人間学的に考察するという別次元の狭い説明方式のなかを動いていることである。ここで私は、ドイツの哲学者マックス・シェーラーが創始した「哲学的人間学」の思想潮流にぞくする哲学者のうち、とりわけアルノルト・ゲーレンの人間学を想起せざるをえない。彼は、ホネットと同様の「ロビンソン・モデル」、つまり孤立した個人という視座設定のうえに立って人間の本質を人間学的に考察したが、彼らは「人間学主義」という思考様式で通底しており、したがって、私が以前に論じたように、その欠点をも共有しているといわざるをえないのである<sup>(28)</sup>。

しかし、きわめてわかりにくい錯綜した叙述に付き合うよりも、ホネットが掲げる具体的な事

例を検討する方が手っ取り早いであろう。ホネットが掲げる「承認の忘却」としての「物化」の事例としてわれわれが確認できるのは、わずかにいくつかの事例のみである。そのひとつはテニス・プレイヤーの事例である。彼は、おそらくは親友を元気づけようとする動機からこの親友とテニスを始めるが、彼はそうするうちに勝負に勝とうという功名心が強くなってしまい、当初の目的を忘れて相手に勝つことに没頭してしまった、という<sup>(29)</sup>。しかし、これはまったく本来の物象化とはいえない空疎な事例であって、むしろ「自己疎外」というカテゴリーに分類する方が妥当であろう。もうひとつは、ありふれたものだという理由で具体例が示されないが、「先入見またはステレオタイプのために、承認を事後的に拒否すること」<sup>(30)</sup>または「先行する承認の拒否を強制する、社会的に作用する思考図式」<sup>(31)</sup>とされるから、いったんはある人種を承認して受け入れたにもかかわらず、これに対する先入見ないし社会的偏見によってこうした承認を取り消すことになったというような人種主義を連想してよいであろう。

そのほかにも、物化するふるまいの「ひどい非人間化の諸形態」として「人身売買」<sup>(32)</sup>、「女性のポルノグラフィーというかたちでの上演」<sup>(33)</sup>などの事例があげられ、さらには人間の物化現象が「労働契約の法実体の空洞化が進行することから、子どもたちの才能のポテンシャルをただ遺伝学的にのみ測定し操作するための実践の最初の前兆にいたるまで」<sup>(35)</sup>の範囲に及んでいることが指摘されている。こうした物化の事例と範囲を見れば、ホネットは物化を「承認の忘却」と規定することで、労働問題を含む広範な物化現象を説明しようとする意図を示しているが、しかし、物化現象の分類が系統だっておらず、これら相互の関連性が哲学的に根拠づけられていない。これらの事例をあげることで、反ってホネットは自らの「承認」概念と物象化論との双方がとらえどころなく、準拠枠が不明、空疎、無規定なものであることを示している。そのためにここには明らかに物化と「疎外」または「自己疎外」の概念との混同が見られる。また、労働契約の問題や女性というセクシュアリティの「商品化」は明らかに搾取または貨幣の「物神崇拜」と密接に関連した商業主義的拝金主義と関係しているから、ホネットは自らの物象化論の中へ、ルカーチ物象化論から排除したはずの商品交換過程との関連を再び導入せざるをえない。これこそまさしく自己矛盾というべきであろう。ホネットが社会学的または社会科学的分析の枠組みを放棄したことのつけがこういうかたちで回ってきていると言わざるをえないのである。

## (6) 自己物化または「固有の自己」の物化について

ホネットの物化論に特徴的なこととして指摘できるのは、例えば彼が自己物化die Selbstverdinglichung、または「固有の自己das eigene Selbst」の物化に言及していることである。ホネットによれば、自己物化への傾向は「われわれが自分の心的諸感覚をただたんに観察されるべき諸対象としてか、または製作されるべき諸対象として把握することによって、この先行する自己肯定をわれわれが忘れ始める場合」<sup>(35)</sup>に生ずる。言い換えればそれは、自己表現と関連する社会的習慣行動のなかに、つまり「自分自身の表現のために仕立てられている習慣的行動の完全に制度化された領域」<sup>(36)</sup>に生ずる。例えば、「就職のための面接、特定のサービス提供、組織



されたパートナー斡旋」などがそれだという。「就職のための面接」とは、就職希望者たちが採用試験の面接では自分を会社側に売り込もうとして強引なセールス・トークを行うことであり、「組織されたパートナー斡旋」とは男女がインターネットを利用してパートナー探しを行うことである。しかし、前者の事例は本当の自分を隠してウソ偽りを言うこととほとんど変わらないであろうし、後者の事例も情報媒体の普及による人間関係またはコミュニケーションの希薄化というような社会現象の変化のカテゴリーに分類してよい事例であろう。こうしたきわめて卑近な事例までも「承認の忘却」として物化また物象化の現象に組み入れるならば、ありとあらゆるものが物化現象となってしまうかねないであろうし、何よりも物化現象でないものの基準を示すことが不可能となってしまうに違いない。そして、こうした事態は、彼の物化論がマルクスとルカチの物象化論からますます遠ざかり、これらがもっている社会批判の意義を実質的に無力化するだけではなくて、本来の物象化論そのものをも解体することにもつながるであろう。

## 第2章 マルクスにおける物象化と物神崇拜の理論

ホネットの物化論の問題点を総括する前に、われわれはどうしても物象化という概念と物象化論の最初の定礎者であるカール・マルクスの社会思想を概観しておく必要がある。このことは、ホネットが物象化論の源泉をなすマルクスの思想をまったく参照することがないだけに、そしてこのことがホネットによる物象化論の空疎化または歪曲というべきものにつながっていると思われるだけに、いっそう避けては通れない作業である。

周知のように、マルクスの物象化論は主著である『資本論』のなかの「第一章商品」の、とりわけ「第四節 商品の物神性格とその秘密」において展開されている。例えばマルクスはこう書いている。「商品は、一見すれば自明でありふれた物ようである。商品を分析してわかることは、それが形而上学的なやかましさと神学的なきまぐれに満ちた、きわめて奇怪な物だということである。…机が商品として現れるとすぐに、それは感性的には超感性的な物へと転化する。それは、地面におのれの足で立つだけではなくて、他のすべての商品にたいしては頭で立ち、そしてその木材の頭から机がひとりで踊り始める場合よりもはるかに奇妙な幻想Grillenを展開する。」<sup>(37)</sup> この箇所は社会科学的・人間学的含蓄は深く、重層的である。マルクスの物象化論は、疎外論と同じく基本的には、広く見ればフィヒテ、ヘーゲル、フォイエルバッハなどに代表されるドイツ古典哲学の射程と枠組みのなかにあり、またマルクス個人の社会科学の形成という視点から見れば、『経済学・哲学草稿』から『経済学批判要綱』をへて『資本論』へといたる発展過程のなかで彫琢されてきたものである。しかし、マルクスが物象化そのものを明確なかたちで理論的にまとめて定義した箇所は見当たらず、ここにこの問題の困難さがある。だが、私見によれば、上記の引用箇所に代表されるマルクス物象化論の要点は以下のようにまとめることができるように思われる。

第一に、マルクスによれば物象化とは、商品の生産と交換が社会全体に全面的に拡大するとともに、諸商品の一般的な等価形態または交換価値を表示する手段としての貨幣が流通する発達した社会、とりわけ近代資本主義社会の基本的な特徴にほかならない。この特徴はマルクスによって、物々交換が支配的であった未発展の社会の段階、商品交換と貨幣経済が部分的に導入されながらもこれがまだ社会全体において支配的でなかった古典古代社会の段階、中世における封建領主と農奴との閉鎖的な荘園を基礎とする経済社会との鋭い対比において、常に示されている。したがって、このことから直接に帰結するのは、物象化とは歴史的に規定された一定の発展段階としての近代的な資本主義または資本主義的商品交換社会から決して切り離して理解されてはならない概念だということである。

第二に、商品生産者たちが自らの私的労働の結果としての労働生産物を交換することによって社会的総労働を形成するこうした交換社会にあっては、人と人との間の関係が直接に現れるのではなくて、物象Sacheと物象との間の関係として、物象どうしの関係に結び付けられて現れる。マルクスは言う。「だから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関連があるがままに、すなわち、彼らの諸労働そのものにおける個人どうしの直接的に社会的な関係として現象するのではなくて、むしろ個人どうしの物象的sachlichな関係および物象どうしの社会的な関係として、現象する。」<sup>(38)</sup>『経済学批判』においてはもう少しわかりやすくこう書かれている。「交換価値を生み出す労働を特徴づけるのは、個人どうしの社会的関係が、いわば逆転して、つまり物象どうしの社会的関係として示されるということである。ひとつの使用価値が交換価値としてそのほかの使用価値に関係する限りにおいてのみ、さまざまな諸個人の労働は同等で一般的な労働として互いに関係させられる。」<sup>(39)</sup>だから、マルクスが言う物象化とはもともと、商品交換社会においては、それ以前の社会に支配的であった人と人、人格と人格との関係が物象と物象との関係というかたちをとって現れ、そうして人間と人間の関係が物象と物象との関係に従属して現れざるをえないということを示しており、そのかぎりにおいては物象化はいわゆる「疎外」の現象とゆるやかに関係する<sup>(40)</sup>。人間自らが作りだしたものが交換価値の関係に踏み入ることによって、人間の手を離れた自立的な力となり、人間自らが制御しえない物象的な力へと転化するからである。こうした社会では、「物象の人格化」および「人格の物象化」とが矛盾を孕んだ不可分離の関係として現象するであろう。

第三に、さらにマルクスによれば、人と人との関係が物象と物象との関係というかたちをまもって現れるというこうした物象化現象にはこれと不可分にもうひとつの側面が結びついている。それは商品、とりわけ貨幣の「神秘的性格」「謎的性格」である。貨幣とは商品交換における諸商品の一般的等価形態を物質的に表現する手段であり、抽象的人間的労働が価値対象として凝固したものである。しかし、いったん貨幣経済が成立して市場の全体に拡大されていくようになると、貨幣があたかも人間労働とその生産物から切り離されて、自立的なものとなるが、この点に貨幣は「神秘的性格」「謎的性格」「幻影的形態」をもつようになる根源がある。こうした商品と

貨幣の「神秘的性格」とは、端的に言って、貨幣それ自体があたかも自然的な属性としておのれ自身のうちに価値をもつかのような「幻想」を生ぜしめるところにある。こうして「金は同時に、形態から見れば一般的労働の直接的な体现であるとともに、内容から見ればすべての現実的労働の総括である。…貨幣としては金にはその金色の壮麗さが返還される。それは奴隷から主人になる。それはただの下働きから諸商品の神となる。」<sup>(41)</sup> 宗教においては、人間の頭脳の産物である神が、いったん生み出された後は、独自の生命をもつ自立的なものとして崇拜されるようになるが、マルクスはこれと同様に、商品世界においても人間の手による労働の結晶である商品と貨幣にこれと共通の現象があると見なして、これを商品世界における「物神崇拜Fetischismus」<sup>(42)</sup>と名付けた。確かに、無制限の貨幣蓄蔵への要求または拝金主義はこうした呪物崇拜にもとづく現代社会の基本的傾向であるといつてよいであろう。

第四に、マルクスは、物象化と商品と貨幣の物神崇拜の傾向を現代社会の過去・現在・未来という歴史的展望のなかでとらえようとしている。マルクスによれば、物象化現象が支配する現代社会は永遠に持続するものではなくて、かつて物象化が基本的に存在しなかった時代から生みだされ、そして物象化の支配を揚棄するさらに高い次元の社会へと移行する必然性をもつ。つまり、西欧社会の発展は三つの歴史的諸段階をへて進展するという展望が示される。その第一の段階は、物象化がまだ現れることのなかった、資本主義的生産関係以前の「人格的な依存関係」の社会形態であり、その第二の段階は「物象的依存のうえに築かれた人格的独立性」を基本とする資本主義的社会の社会形態であり、第三の段階は「諸個人の普遍的な発展のうえに築かれ、また諸個人の共同体的、社会的生産性を諸個人の社会的能力として従属させることのうえに築かれた自由な個性性」による社会形態である。第三の歴史的段階は第二の歴史的段階を条件としてのみ、言い換えれば、第二の段階からの内在的な発展としてのみ切り拓かれる<sup>(43)</sup>。この第三の段階では「現実的世界の宗教的反射は一般的に言って、実践的な日常生活の諸関係が人々に対して彼らのお互いと自然とに対する理性的な関連を日常的に目に見えるかたちで表示する場合にのみ、消滅する。社会的な生活過程、すなわち物質的な生産過程の形態は、それが自由に社会を構成した人々の生産物として彼らの意識的な計画的統制のもとに置かれるやいなや、その神秘的な霞のヴェールを脱ぎ捨てる。」<sup>(44)</sup> マルクスによれば、人と人との関係が物と物との関係に結び付けられて現れ、そうして物象と物象との関係によって人と人との関係、つまり私的労働の社会的性格が物象的に覆い隠されることが物象化の現象を示す主要な局面であるとすれば、こうした事態は物象と物象との関係を人間の手に取り戻すことによって消滅させることができる。つまり、『資本論』の他の箇所では「人間は、宗教において自分自身の頭の制作物によって支配されるのと同じように、資本主義的生産においては自分自身の手の制作物によって支配される」<sup>(45)</sup>のだから、物象化の消滅は、自らの制作物を自らの手によって支配しうる状態を回復することにかかっている。現代社会は、労働者が自らの生産物に投下した特殊的具体的労働が商品交換社会のなかで抽象的一般労働としてのみ意味をもち、こうして商品がもつ使用価値と価値とが対立し、「物象の人格化」

と「人格の物象化」とが対立することによって、「恐慌」へと突き進む可能性をもつ、いわば無政府的な社会であるが、それはそれ自身のうちに自らを内在的に揚棄する可能性をもつ。もちろん、そうした社会を生み出すためには、一連の社会的な基礎と諸条件の長い苦難に満ちた成熟が必要であり、その諸条件とは何かが問題とされねばならない。しかし、ここではわれわれは、マルクスが物象化の現象を克服しうる歴史的展望を示しており、しかもその諸条件を、物象化を発生させる当の基盤である商品交換社会という所与の歴史的諸条件のなかに求めていること、そして物象化の克服は決してこの商品交換社会を離れてはありえず、商品交換社会の内部の現実的諸条件からのみ内在的に引き出しうると考えていることを確認すれば十分であろう。

われわれは、マルクスの「物象化」と商品・貨幣の「物神崇拜」にかんする理論にかんしてその主要点を上記の四点に要約した。もちろん、マルクスの経済学理論の含意と含蓄はこれらの点に尽きるものでは決してない。しかし、これらがマルクスの物象化論を構成する諸要素および基本線であることを確認し、これからルカーチやホネットの物化論を検討するにあたっては、たえずこれらを確認することにしよう。

### 第3章 ルカーチによる物象化論の継承と展開

以上に要約されたマルクスの物象化論に改めて注目してこれを継承するとともに、これに独自の解釈を施し、新たな創見をも付け加えようとしたのが、1922年末に公刊されたルカーチの著『歴史と階級意識』、とりわけその第四章「物象化とプロレタリアートの意識」である。「西欧マルクス主義を進水させた」<sup>(46)</sup>とも評されるこの著作は、ルカーチ自身が参加したハンガリー革命の失敗と挫折のなかで、ほどなくして資本主義的経済体制が崩壊するとの予感、その変革の主体たるべきプロレタリアートの意識変革という熱烈な実践的意識をもって書かれた、アカデミー世界の外部に位置する著作である。そのうえ、彼自身が後年になってこの著の長所と短所とを自己批判的に総括しているように、時代的制約といくつかの欠点を免れることはできなかった<sup>(47)</sup>。初期マルクスの『経済学・哲学草稿』の所在が知られるようになったのが1930年代のことであるから、ルカーチはまだこの著作に接していなかったが、それにもかかわらずルカーチが「疎外」や「外化」などの諸概念とゆるやかに関連させながら物象化の諸現象とその解決に迫ろうとしたこと、マルクスの諸著作を丹念に研究してその成果を数多くの引用というかたちで示していること、教条主義とたんなる受け売りに陥ることなく彼がハイデルベルク時代に交流があったマックス・ウェーバーの「合理化」と官僚制論などの理論にかんする研究成果を導入して彼なりにマルクスの物象化論をさらに発展進化させようと試みたことなどは注目に値する。この著作は、当時であってはそれなりに高い水準を示していたのであり、しかもそれがアカデミーの外部にあって、しかもプロレタリアートによる社会の実践的な変革の活動のさなかで書かれたことを考えれば、当時であってはやはり画期的なことであったであろう<sup>(48)</sup>。

周知のように、ルカーチの『歴史と階級意識』の大きな特徴は、方法論的にはマルクスよりもヘーゲルに依拠しながら、「総体性」のカテゴリーを革命的な方法として打ち出すとともに、エンゲルス流の自然の弁証法に対していわゆる「主体と客体との弁証法」を展開しようとしたところにある。ルカーチによる物象化論の継承と豊富化の試みも、「主・客弁証法」という枠組みのなかで、これに引きつけて展開されている。私見によれば、ルカーチの物象化論は、マルクスのそれと比較した場合、以下のような特徴をもつものとして総括することができよう。ただしこの総括は、本論考でホネットの著作を論評するのに必要な限りで行うものであって、その全面的な展開については他日を期することにした。

第一に、ルカーチがこの書物のなかで物象化論を展開する場合、その前提として基本的にマルクスの物象化論を踏まえて行っていることは承認されてよいであろう。ルカーチは物象化という現象が、人間と人間との関わりあい商品交換に媒介されることによって物象性という性格をもち、この性格は商品経済社会の発展と軌を一にして強められ、資本主義社会において全面的なものとなるということをはほぼ正確に理解している。例えば、彼はこう述べている。「商品構造の本質は、人格と人格との関係、関連が事物具有性 Dinghaftigkeit の性格をもち、このようにして『幽霊のような対象性』をもつことにもとづいている。その対象性は、その厳密な、外見上はまったく閉ざされた、そして合理的な独自の法則のなかに、おのれの根本存在、つまり人間間の関連のすべての痕跡を隠している。」<sup>(49)</sup>「問題のこうした普遍性は、商品問題が…資本主義社会の中心的で構造的な問題としてそのすべての生活表明のなかに現象する場合にのみ、達成される。」<sup>(50)</sup> また「経済的神秘化」も取り上げられている。これらは、細部においてはやや気になる点はあるものの、これを除外すれば、おおよその点でマルクスの物象化論に即して叙述されているし、マルクスからの引用箇所もほぼ適切であると見てよいであろう。だが、それは叙述の端緒においてだけである。

第二に、次にルカーチは「こうした構造的な根本事実によって、人間固有の活動、人間固有の労働が客体的なもの、人間から独立したもの、人間に疎遠 menschenfremd な固有の法則性によって人間を支配するものとして、人間に対立させられる」<sup>(51)</sup>と述べており、物化または物象化が「疎外」または「人間疎外」と関連することを見抜いている。ルカーチは、この時点では初期マルクスの『経済学・哲学草稿』の「労働の疎外」をまだ知らなかったにもかかわらず、物象化と疎外との相対的な関連を視野に収めていることは注目すべきである。ただし、物象化と疎外の概念に異同を明確に規定していないために、ルカーチのその後の叙述のなかでは彼自身がこれら概念を過度に接近させる傾向もあり、両者の関係が曖昧なものとなった。そして、ルカーチの『歴史と階級意識』刊行後に、西欧マルクス主義とフランクフルト派のなかで物象化の概念内容の揺らぎがさらに強められたことは指摘しておきたい。

第三に、第二の論点と関係することだが、ルカーチ物象化論の問題点は、物象化現象のもとに近代資本主義のさまざまな傾向と特徴点が組み入れられて、もともとの物象化の意味内容の幅が

拡大され、そうすることによって物象化論をますます多義的なものにしてしまったことである。例えば、テイラー・システムによる労働の「合理的機械化」が唐突に引き合いに出され、労働の分業および部分労働化、労働過程の機械化・合理化、そしてそれとともに労働過程が労働者の「魂」にまで食い込んでくるような心理的分断が告発される。ルカーチによれば、これは「労働過程がたえず拡大する規模で抽象的に合理的な部分手作業に分解され、それによって労働者と生産物全体との関係が引き裂かれ、労働者の労働は機械的に反復される専門機能に還元される」<sup>(52)</sup> という事態である。こうした事態は「合理化」にほかならないが、このことはさらに「計算または計算可能性」「労働過程の合理的・計算的分断」と関係させられる。「労働者の心理学的な性質さえも、彼の全人格性から切り離されて、この人格性に対して客体化される。そのためにこの性質は合理的な専門システムの中へと組み込まれ、そしてそこで計算されうる概念となる。」<sup>(53)</sup>

ルカーチのこうした叙述における問題点は、主客弁証法という方法概念に主導されて、物象化論のもとに、資本主義的分業や合理化、労働者の心理的分断などの一切が包摂されていることである。こうしてますます物象化と資本主義的労働および生産過程の特質との区別が曖昧にされることとなった。しかし、すでに述べたとおり、マルクスの物象化と「貨幣の物神崇拜」は『資本論』第一編第一章「商品」で展開されており、分業または部分労働によって「人間をその諸器官とする一生産機構」がもたらす非人間化については、例えばその第四編「総体的剰余価値の生産」第12章以下で叙述されている。したがってマルクスは、資本主義的商品交換社会の根本傾向である物象化と労働分割・専門化・合理化とがただちにイコールだと見ているわけではない。ここに物象化論におけるマルクスとルカーチの齟齬があり、これが物象化そのものをこれらと混同するような誤解の温床を造り出すことになったと思われる。

第四に、ルカーチは、マルクスの物象化論にかんする議論の中に、マックス・ウェーバーの歴史と社会科学にかんする研究成果を、論理的な媒介の作業を省略したまま、ストレートに持ち込んでいる。その研究成果とは、周知のように、近代資本主義的経営の基本が何よりも「計算」に基礎を置き、機械と労働の機能が合理的に計算できるような技術にもとづいて労働を合理的に組織することにあるという理論であり、また近代的な法と国家と行政が個人の欲求や能力などの質的側面を分離していっそう形式化・合理化するところに成立するという近代官僚制の理論である。ルカーチがマルクスの物象化論をさらに内容的に豊富化しようとしてこれらの研究成果を生かそうとしたその意欲はそれなりの意味あるものであったにしても、マルクスの物象化論とは内容的にかみ合わないままに接合されているという印象は否定することができない。

第五に、ルカーチは、マルクスからの引用を豊富に散りばめた叙述の中に、マルクスの物象化論が決して言及しなかったことをとところどころに挿入しており、それは叙述の進行のなかでますます強く表現されている。それは、端的に言って「物化された意識」および「意識の物化」という考え方であり、まったくルカーチ独自の発想である。例えばルカーチは、マルクスの経済的分析を前提としながらも、自らの理論的課題について「ここではただ…一方では商品の物神崇拜

的な性格から対象性形態として生じ、他方ではこの対象性形態に付随した主体の行動から生じる根本問題が示されるべきである」<sup>(54)</sup>と述べている。彼の物象化現象の分析はここで、物象化が及ぼす主体の行動またはふるまいに対する影響に重点が移行し、「近代の、すでに支配的な商品形態の影響を受けて物化されている思考習慣」<sup>(55)</sup>、すなわち「物化された意識」<sup>(56)</sup>が問題となる。そこから、「労働の物化過程」と並んで「労働者の意識の物化過程」もまた問題とされなければならない。こうした表現は、意識と物化との両者が主体・客体の弁証法の中に組み込まれた結果として成立したと考えられる。しかしすでに論じたように、マルクスの物象化論は、商品交換社会においては社会的生産における人と人との関係が物と物との関係に媒介されて現れざるをえず、これが商品と貨幣の「物神崇拜」という現象に端的に象徴されていることを示したのであって、意識を直接に物象化したり意識そのものが「物化」されるなどという問題レベルは考慮していない。ここにルカーチの物化論とマルクスの物象化論との間の思想的な断層がその姿を現している。こうした事態までも直接に物象化と見なすならば、物象化概念を限りなく多義的に、また曖昧にし、概念を混乱に導く恐れがある。そして、ここにルカーチ以後に「物象化」概念が資本主義的商品交換関係から切り離されて曖昧なかたちで独り歩きしていく可能性が指示されているといえよう。

第六に、ルカーチが「物化された意識」と「意識の物化」の具体的な内容として念頭に置いているのは、ひとつには、機械に対する労働者の隷属と労働過程の「合理的・計算的分解」の結果、労働者は機械のシステムのなかにその一部として組み込まれることで、「意志の喪失」と「静観的態度」という憂慮すべき事態が生ずることになる。「こうした意志の喪失は、労働者の活動が労働過程の合理化と機械化の進行とともにいっそう強くその活動性格を失い、静観的態度になることによって、さらに強められる。」<sup>(57)</sup>という状況が作り出されることを問題視することになる。そして、こうした「静観的態度」または「傍観者の姿勢」が典型的に示されるのが社会的な出来事に対する「専門的な『巨匠』」の態度であり、またそれがもっともグロテスクなかたちで示されるのが「ジャーナリズム」とその「無定見」だと規定されるのである<sup>(58)</sup>。もちろん、こうした社会学的分析もまたマルクスの物象論の中には存在しない。「静観的態度」などは広い意味において労働者の「疎外」に該当するであろうし、これを物象化現象の中にただちに組み入れるならば、物象化概念の混乱を招く恐れがあろう。だが、これに対して「ジャーナリズム」の「無定見」はその商業主義＝拝金主義との関係が問題となりうるし、こうした商業主義＝拝金主義は広い意味では物象化現象と関係する可能性をもつ。社会学的分析にもとづく知見は、物象化を生み出す社会経済的諸関係を基盤とし、これとのかかわりでしっかりと位置付けられ、物象化と明確に論理的に関連づけられるならば、マルクスの物象化論を社会学的にさらに内容豊かに発展させる可能性をもつであろう。

第七に、ルカーチはプロレタリアートの立場から「ブルジョア的思考の二律背反」と題する第二節で近代の批判哲学を総括的に批判するが、その基本的観点は「近代の批判哲学は意識の物

化された構造から成立した」<sup>(59)</sup>とみなすところにある。ルカーチによれば、近代の批判哲学は、近代科学の発展と軌を一にして、「悟性によって支配、予見、計算できる諸現象の側面」から合理主義的な方法モデルによって接近したために、歴史の「総体性」を看過し、歴史の変革の主体である労働者の「同一の主体・客体」の弁証法の歴史的意義を把握できなかった。その典型は認識の内容と主体とを「人間」そのものから切り離して純粹に形式的な主観としてとらえようとしたカントである。しかし、ドイツ古典哲学の発展を「意識の物化」の過程としてただちに描き出そうとするルカーチの試みは、明らかにマルクス物象化論からの「逸脱」であり、その拡大解釈である。商品交換社会という経済的諸関係にかかわる場面で生じる物象化現象とイデオロギー的な上部構造とは明らかに異なったレベルにあり、これをただちに同一視するような議論は混乱を招く。ブルジョア哲学を労働者階級の立場から批判しようとする試みそれ自体は正当な動機をもつが、これを「意識の物化」として批判することはマルクス物象化論の射程をはるかに超えている。もしも、ルカーチが言い当てようとしたことに関連する事態を『資本論』の中に探すとすれば、その手掛かりは「[[ブルジョア—筆者] 経済学者たちの一部が、商品世界にまわりついた物神崇拜もしくは社会的労働諸規定の対象的な外見によっていかにひどく欺かれるか」<sup>(60)</sup>という叙述にあるといえよう。つまり、これと関連するのは、物象化と物神崇拜に惑わされて交換価値を価値とする商品経済の本質を見抜くことができない一群のブルジョア経済学者ということになろう。しかし、だからといって、これを「意識の物化」と形容することはできないであろう。

第八に、マルクスの物象化論は、近代資本主義の物象化という本質の事態を指摘しただけではなく、これといわばセットにして、近代資本主義と物象化の超克という展望を示している。つまり、いかにして「物象化」現象と「物象化」によって貫かれた近代社会を乗り越えることができるかという問題意識を合わせもっていた。ルカーチもまた、労働者革命という切羽詰まった時代の状況に迫られて苦闘していた点で、マルクスよりもいっそう実践的に深刻な、それゆえにきわめて局限された展望ではあったが、物化および「意識の物化」をどのようにして超克するかという問題意識を共有していた。彼にとってはとりわけ労働者の「静観的態度」を克服することが深刻な問題であった。ルカーチがこの問題に対して与えた解答は、労働者が「この物化された状態の直接性を乗り越える」<sup>(61)</sup>こと、そのためには「主体的には、こうした物化の構造が意識の中で揚棄され、こうして実践的に打破されうる時点」<sup>(62)</sup>を準備することであった。しかし、プロレタリアートの階級的自覚と実践的・変革的意志だけに社会変革の梃子を求めようとする考え方は容易に主観主義または観念論的な主意主義に陥る危険をもつ。実際にルカーチのこの展望は実践的に破綻することとなった。だがわれわれは、物化または物象化の現象を指摘する以上は、その克服の方途をも合わせて展望することの重要性をルカーチの物化論から学ぶことができるであろう。ルカーチ以後、とりわけフランクフルト学派とホネットにおいては、物象化の超克の展望を示すという点においても問題意識の欠落を指摘することができるように思われる。

ともあれ、これまでの論考が示したように、ルカーチの物化論には、彼自身によって必ずしも



明確に整理されないままに、マルクスの物象化論の継承と豊富化の試み、その結果としての修正と逸脱、そして物象化概念の拡大と曖昧化などの多様な側面が混在・同居しているように思われてならない。マルクスとルカーチの物象化論を相互に比較対照しながら、これらの論点の異同を逐一検証していく作業が今なお必要である。この作業がしっかりとなされて、現代社会の社会的または社会科学的分析と結合して、その積極的な側面が活かされるとすれば、彼らの物象化論はさらに発展的に豊富化されるであろう。しかし、この作業がなされないかまたは不十分なままに、物象化論の理解と解釈が安易に行われるとすれば、本来の物象化論は近代資本主義的商品生産・交換社会との関連を切断されて、自立して独り歩きしていき、きわめて曖昧で表層的なものへと変貌してしまい、その結果として社会批判としてはほとんど意味をもたない無力なものへと変貌していく可能性をもつことになろう。ルカーチの物象化論はこうした可能性の分岐点のうえに位置している。私見によれば、ルカーチの物象化論は、マルクスのそれを継承しつつも、そのなかにマルクスの段階よりもさらに発展した社会科学などの成果を取り入れようとした点でその評価が分かれるが、しかし、それらは資本主義的な商品交換社会の根本特徴との関連を明確に維持する限りでは、マルクス物象化論の豊富化につながる可能性をもっているし、それ自体社会批判の理論としての意味をも失うことがないように思われる。

問題となるのは、ルカーチ以後のフランクフルト派の物象化論がこの可能性を現実化する道を歩んだのかどうか、そして本稿が対象とするホネットの物化論がこの観点からどのように評価されるのか、である。私には、ホネットの物化論がこれとは反対の道を歩み、その結果としてフランクフルト派の理論に伏在していた問題点をひとつの究極の帰結にまで導いたように思われてならないのである。

#### 第4章 ホネットの物化論と承認論の問題点の総括

以上に総括したマルクスとルカーチの物象化論の諸特徴を参照しつつ、ホネットの物化論と承認論の問題点にかんして総括的にまとめるとすれば、さしあたり以下の9点を挙げることができるであろう。

- (1) ホネットは、自らの物化論を提示するにあたって、物象化論の定礎者であるマルクスの『資本論』で展開された社会科学的な視点にもとづく物象化論をまったく参照していない。つまり、物象化論をその源泉にまでさかのぼって問題とすべきなのに、この前提となるべき仕事を放棄している。その結果として彼の物化論は、資本主義的商品経済社会に特徴的な事態、つまり人間と人間の関係が商品という物的関係に結びつけられて現れ、それが貨幣の物神崇拜という人間と物とが転倒した奇妙な現象に端的に現れるという事態を言い表す本来の物象化論から大きく逸脱している。

- (2) ホネットは、フランクフルト派の理論家の多くがそうであるように、マルクスの物象化論を経由せずに、いきなりルカーチの物象化論から議論を開始し、しかもそのさいにルカーチの理論をまともに論じ評価する作業をも放棄して、多くの場合これを自らの理論に強く引きよせてきわめて一面的な仕方を利用してしている。ルカーチの『歴史と階級意識』を支えていた、労働者階級による社会の変革的实践とその変革意識、資本主義的物象化が労働者に課している非人間的な状況の告発とそれからの解放などの課題意識にもまったく共感していない。つまり、彼はルカーチの物象化論の意図とは別の次元からこれに接近したことで、その解釈からも全体として大きく逸脱することになった。
- (3) ホネットは、ルカーチの物象化論が、商品経済と物化を同一視し、商品交換過程との関係においてのみ物化現象に言及することを非難する。そして、ルカーチの多面性を含んだ物象化論から商品経済という「社会学的な説明枠組み」を切り離して、独自の物化論を展開しようとする。しかし、このことは、資本主義的商品経済を基盤としてその批判から成立する本来の物象化論からもっとも重要なその土台または要素を放棄することを意味する。こうして土台を失ったホネットの物化論は、そのために社会批判としての意味を失い、「批判的理論」の批判性を大きく失うことになる。そして、物化の克服または揚棄およびいっそうの高度の次元における人間性の回復の可能性にかんする展望にかんしても、問題の所在さえ示すことができない。
- (4) ホネットは、ルカーチが力を注いだ論点として、他の人物の物化、対象または自然の物化、自己自身の物化の三つをあげているが、私の知る限り、ルカーチは「意識の物化」について述べたほかは、自然の物化についても、自己物化についても明確なかたちでは議論していない。これら三つの物化なるものについて、ホネットはルカーチの著書の該当する箇所を明示しておらず、自らの理論に恣意的に押し付けたものである可能性が強い。またホネットはルカーチがほとんど重要な意味を与えていない、いわば片言隻句のごときものに注目して、しかもこれらに独自の読み込みを行おうとする。例えば「共感」などがその一例である。しかし、これらは明らかにルカーチの物象化論とその真の意図を逸脱して理解し、そのうえでこれを恣意的に利用しようとする態度にほかならない。この点でもホネットのルカーチ解釈には多くの問題点が指摘されよう。
- (5) ホネットの物化論の最大の問題点は、「承認」概念を物化に置き換え、「承認の忘却」を物化として理解しようとする点にある。したがって、「承認」の概念が彼の議論の最大の焦点となる。ホネットは、「承認」の概念を導出するさいに、ルカーチの主客図式批判や「共感」、ハイデガーの「気遣い」、デューイの「実践的関心」などの諸概念をそれぞれの文脈を無視して強引またぞんざいにひとつに結び付け、これに加えてトマセロなどの進化人類学の言語論・失語症論、スタンリー・キャヴェルやピーター・ホブソンなどの認知主義批判など、利用できるものを何でも利用しようとする。その結果、本来社会的な場面で成立するはずの

「相互承認」または「承認」が換骨奪胎されて、個人とその環境世界との関係というようなきわめて曖昧で無規定なものに拡大されてしまう。

- (6) ホネットにとって「承認」の概念は、個人が環境世界の対象を認知的に理解する以前の状態であり、また環境との相互作用を維持しながら状況を経験する根源的な状態である。つまり、「承認する態度とは、他の人格や事物がわれわれの生活の遂行に対してもつ質的意味を尊重することである」。さらに「承認」は、認識以前の、認識に対して優位を占めるものとされる。そうすると、「承認」の概念は個人の発達心理学的な次元で一定の時期に成立するのか、それともそうでないのかさえも、不明で、曖昧で無規定なものになる。つまり、何が「承認」で何が「承認」でないかの準拠枠が示されないまま、彼の物化にとって最も重要な概念へと高めあげられてしまうのである。こうした「承認」概念は、彼がかつて研究したヘーゲルを初めとするドイツ古典哲学の伝統から見てあまりにも異質であるとともに、この研究の中で彼が用いた「承認」概念をあまりにもゆるく拡大しすぎている。
- (7) ホネットの物化論の独自の点は、こうして拡大された「承認の忘却」が物化だとされる点にあるから、社会的には実質的に無意味なものになりかねないという危険が生ずる。社会経済的な諸関係が視野から消失しただけでなく、「承認」が社会的な相互承認という場面を離れて無限定に拡大されるから、「承認の忘却」もその結果としての「物化」も、その社会的意味を失って無限定に語られることになる。とりわけ問題なのは、「承認の忘却」としての「物化」が準拠枠を明示されず、しかも社会的場面を離れて語られるから、問題の次元が個体と環境との関係という人間学的次元に引き下ろされる。人間学的に、つまり人間がもつ性質という次元から眺められた「承認」も「承認の忘却」も「物化」も人間的な事実として語られ、もって生まれた人間の本性に還元されて既成事実化され、いわば運命的なものとしてされることになる。そのために、これらの物化現象の克服や超克が問題になる局面は永遠に失われるか、あるいは良くても個人的な努力に任されるということになる。
- (8) ホネットの物化論が無内容で社会批判としてもきわめて意味の薄いものへと変容していることを示すのが、いくつかの卑近な事例である。本稿の先立つ箇所考察したように、テニス・プレイヤー、就職の面接の場面で強引なセールス・トークを行う就活学生などの事例はほとんど「自己疎外」と言うべきものである。他方では、人種差別、女性の性の商品化、遺伝子の選別などの事例もまた、「承認の忘却」などのカテゴリーではカバーできない概念内容上の広がりや社会的・経済的なつながりを持ち、現代社会の商業主義または貨幣の物神崇拜と内的に深く関係し合う。だからホネットは、自らの物化論から社会経済的諸関係を排除したにもかかわらず、みずからこれらの関係を自分の物化論に引き入れざるをえない。これは自己矛盾であって、ホネットはこれらの事例を論理的に媒介せずにかかげることで、この自己矛盾を自ら認めているに等しいように思われる。こうした卑近でありきたりの事例が物化論のなかにきちんと分類・位置づけがなされずに、無秩序に掲げられると

ころに、ホネットの物化論の曖昧さがあると言わざるをえない。

- (9) マルクスとルカーチの物象化論がもつ近代社会および近代資本主義の根本的批判という視座を実質的に排除しようとするホネットの物象化論は、そのことによってルカーチ後のフランクフルト派自体の発展過程から社会批判の武器を捨て去り、「批判的理論」の存在理由である「批判」を捨て去るものである。フランクフルト派の理論自体、資本主義的経済諸関係とのかかわりをできるだけ避けて、「意識の物象化」概念を重視し、これのみを継承しようとする傾向を伴っていたが、この傾向はホネットの物象化論によって最も際立ったかたちで推し進められることになった。だから、彼の物化論はこうした傾向の、いわば究極の帰結といえよう。そして、このことはホネットをして当のフランクフルト派からも離脱させかねないものである。ホネット自身、自らがフランクフルト派の第三世代と呼ばれることを肯んじていないということも、こうした評価を傍証するものであろう。

以上に展開したすべての根拠から、本稿の結論は以下のようにならざるをえない。物化を「承認の忘却」と規定するホネットの物化論は、物化と承認の概念内容をあまりにも拡大して曖昧化したことのために、マルクスを源泉としルカーチを経由した本来の物象化論がもつ社会批判としての意義を無に等しくし、そのことによって、物象化論にアクチュアリティを与えるのではなくて、その反対に本来の物象化論を実質的な解体へと導きかねないものである、と。(完)

[2014.8.7最終提出]

## 注

- (1) 邦訳は、辰巳伸知・宮本真也両氏の訳で法政大学出版局から2011年に刊行されているが、そのタイトルは『物象化—承認論からのアプローチ』となっている。
- (2) これらの邦訳がいずれも法政大学出版会から刊行されている。『権力の批判』は河上倫逸監訳、『正義の他者』は加藤泰史・日暮雅夫訳、『承認をめぐる闘争』は山本啓・直江清隆訳である。
- (3) Axel Honneth, *Verdinglichung. Eine anerkennungstheoretische Studie*, Suhrkamp, 2005, S.107. ホネット『物象化』、同上訳、135頁。
- (4) Ibid., S.11. 同上訳、9頁。
- (5) Ibid., S.17. 同上訳、15頁
- (6) Vgl. Georg Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Luchterhand, S.194. ルカーチ『歴史と階級意識』、城塚登・古田光訳、ルカーチ著作集第9巻、白水社、187頁を参照のこと。
- (7) Honneth, *ibid.*, S.14. ホネット、同上訳、11-12頁。
- (8) Ibid., S.94. 同上訳、120頁。
- (9) Ibid., S.95. 同上訳、121頁。
- (10) Ibid., S.96. 同上訳、122頁
- (11) Ibid., S.97. 同上訳、123-4頁。
- (12) Ibid., S. 98. 同上訳、124頁。
- (13) Ibid., S.98. 同上訳、125頁。

- (14) Ibid., S.98-99. 同上訳、125頁。
- (15) Vgl.Georg Lukács, Geschichte und Klassenbewußtsein, S.257ff. ルカーチ『歴史と階級意識』、同上訳、259頁以下を参照のこと。
- (16) Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer, S.191ff. ハイデガー『存在と時間』上、細谷貞雄・亀井裕・船橋弘訳、理想社、316頁以下。
- (17) Georg Lukács, Geschichte und Klassenbewußtsein, S.179. ルカーチ、同上訳、171頁。
- (18) Ibid., S.180. 同上訳、172頁。
- (19) Honneth, ibid., S.34. ホネット、同上訳、39頁。
- (20) Ibid., S.34-35. 同上訳、39頁。
- (21) Ibid., S.37. 同上訳、39頁。
- (22) Ibid., S.42. 同上訳、39頁。
- (23) Ibid., S.41. 同上訳、39頁。
- (24) Ibid., S.45. 同上訳、39頁。
- (25) Vgl.Honneth, Kampf um Anerkennung, 7. Auflage, Suhrkamp, 2012. ホネット『承認をめぐる闘争—社会的コンフリクトの道徳的文法』 同上訳を参照されたい。
- (26) Honneth, Verdinglichung, S.42. ホネット『物象化』48頁。
- (27) Ibid., S.39. 同上訳、44頁。
- (28) 奥谷浩一『哲学的人間学の系譜—シェーラー、プレスナー、ゲーレンの人間観』（粹出版社、2004年）293頁以下を参照されたい。なお、「ロビンソン・モデル」という批判的視座は実質的にルカーチの『歴史と階級意識』のなかに見られる。
- (29) Honneth, ibid., S.71. 同上訳、87-88頁。ただし、ホネットはこの事例をあげたことをその後の討論のなかで批判され、この批判をうけてこの事例を取り消したという。ホネット『物象化』「訳者解説2」184頁を参照のこと。
- (30) Ibid., S.71. 同上訳、89頁。
- (31) Ibid., S.72. 同上訳、89頁。
- (32) Ibid., S.98. 同上訳、124頁。
- (33) Ibid., S.102. 同上訳、129頁。
- (34) Ibid., S.101-102. 同上訳、128頁。
- (35) Ibid., S.104. 同上訳、131頁。
- (36) Ibid., S.104. 同上訳、131頁。
- (37) Karl Marx, Das Kapital, Erster Band, Marx Engels Werke Bd. 23, Erster Band, Dietz Verlag, S.85. マルクス『資本論』第1分冊（マルクス＝エンゲルス全集第23巻a、大月書店）96頁。なお、マルクスの商品論と価値論の読解にかんしては、『資本論』の最終版であるマルクス『フランス語版資本論』上、江夏・上杉訳、法政大学出版局、イ・イ・ルービン『マルクス価値論概説』竹本進訳、法政大学出版局、1993年などを参照した。
- (38) Ibid., S.87. 同上訳、99頁。
- (39) Karl Marx, Kritik der politischen Ökonomie, Marx Engels Werke Bd.13, S.21. マルクス『経済学批判』（マルクス＝エンゲルス全集第13巻、大月書店）19頁。
- (40) 例えばマルクスは『剰余価値学説史』のなかで、経済学者ホジスキンの労働の一定の社会的形式を物、つまり労働の生産物に帰着させていることを「関係そのものが物的な形態で眼前に幻想されている」と形容し、こう書いている。「もしも諸物 die Dinge がこうした疎外された形式で労働に対立することをやめるならば、これらの物はこうした諸作用 [諸物が労働過程の対象的な諸契機としてもつ諸作用] をもつことをやめるであろう。」Vgl.Karl Marx, Theorien über den Mehrwert, Dritter Teil, Marx Engels Werke Bd. 26, Dritter Band, S.290. マルクス『剰余価値学説史』第3巻（マルクス＝エンゲルス全集、第26巻、第3分冊）385頁を参照されたい。疎外概念はマルクスの『資本論』全体に散見される。
- (41) Karl Marx, Kritik der politischen Ökonomie, S.103. マルクス『経済学批判』、同上訳、104頁。
- (42) Karl Marx, Das Kapital, Erster Band, S., S.87. マルクス『資本論』第1分冊、同上訳、98頁。
- (43) Karl Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Europäische Verlaganstalt Frankfurt, S.75-76. マルクス『資本論草稿集』①（「1857-58年の経済学草稿I」大月書店）138頁。
- (44) Karl Marx, Das Kapital Erster Band, S.94. マルクス『資本論』第1巻、第1分冊、同上訳、106頁。
- (45) Ibid., S.649. マルクス『資本論』第1巻、第2分冊、同上訳、811頁。

- (46) マーティン・ジェイ『マルクス主義と全体性』(荒川磯男ほか多数訳) 国文社、150頁。
- (47) Georg Lukács, Vorwort (1967), Geschichte und Klassenbewußtsein, *ibid.*, S.5ff.
- (48) ルカーチの『歴史と階級意識』をめぐる国際的な論争とその影響については池田浩士編訳『論争・歴史と階級意識』(河出書房新社、1977年)を参照のこと。
- (49) Georg Lukács, Geschichte und Klassenbewußtsein, S.170. ルカーチ、同上訳、162頁。
- (50) *Ibid.*, S.170. 同上訳、161頁。
- (51) *Ibid.*, S.175. 同上訳、166-167頁。
- (52) *Ibid.*, S.177. 同上訳、169頁。
- (53) *Ibid.*, S.177. 同上訳、169頁。
- (54) *Ibid.*, S.171. 同上訳、163頁。
- (55) *Ibid.*, S.171. 同上訳、163頁。
- (56) *Ibid.*, S.185. 同上訳、178-179頁
- (57) *Ibid.*, S.179. 同上訳、171頁。
- (58) *Ibid.*, S.193-194. 同上訳、186-187頁。
- (59) *Ibid.*, S.209. 同上訳、209頁。
- (60) Karl Marx, Das Kapital Erster Band, S.97. マルクス『資本論』第1巻、第1分冊、同上訳、110頁。
- (61) Georg Lukács, Geschichte und Klassenbewußtsein, S.292. ルカーチ、同上訳、300頁。

追記 注を作成するにあたっては、読者の便宜のために日本語訳のあるものについては出来る限り該当する頁を示したが、本稿の訳文は概ね原文からじかに訳出しており、基本的にこの日本語訳にしたがってはいない。なお、マルクスの物象化論にかんしては、佐々木隆治『マルクスの物象化論—資本主義批判としての素材の思想』(社会評論社、2010年)から学問的な刺激を受けた。また、完成原稿を提出する直前になって辰巳伸知「ホネットの物象化論—その射程と限界」(『仏教大学社会学部論集』第51号、2010年9月)があることを知った。ホネットが本来の物象化論を骨抜きにし、承認概念も拡大しすぎていることなど、同論文のいくつかの論点には基本的に賛同したい。

Axel Honneth's Theory of Reification and Recognition

Koichi Okuya

Abstract

Axel Honneth is a German social philosopher in the “third generation” of the Frankfurt School. He published a book *Reification: A Recognition-Theoretical View*. He intends to add actuality once again to the *theory of objectification* that was established by Marx and developed by Lukacs. Thereby, Honneth reactualizes reification in a rather unique way. A salient feature of Honneth's theory is in the understanding of reification as recognition oblivion. Specifically, he reinterprets Lukacs' theory and applies the reinterpreted theory to the concept of reification on the basis of Honneth's original concept of recognition. However, his peculiar concept of reification is fraught with problems, because it excludes a capitalist viewpoint on the sphere of commodity exchange from the *theory of objectification* that was formulated by Marx and Lukacs, and also because Honneth attempts to expand the concept of the mutual recognition between individuals which takes place in the social dimension into a concept of recognition, in disregard of cognition, that takes place between individuals and their environmental world. In doing so, Honneth is reinterpreting Lukacs' theory on the levels of individuals and philosophical anthropology. The apparently intentional reinterpretation and expansion of the key concept of Lukacs' theory by Honneth seems to result in a diminished significance of the *theory of objectification* in social criticism. In light of this, this paper will review the basic concept of the *theory of objectification* developed by Marx and Lukacs with the aim of identifying and analyzing problems in Honneth's theory of reification and recognition.

Keywords: reification, objectification, recognition, mutual recognition, fetishism, capitalist sphere of commodity exchange

(おくや こういち 本学人文学部教授 哲学専攻)